
黒猫のひだまり

春蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫のひだまり

【Nコード】

N3088B

【作者名】

春蘭

【あらすじ】

黒猫を不吉と言った人間。自分達は嫌われ者と言ったカラス。ボクを可愛いと言った女の子…。今日はきつと、いい夢が見れるだろう。

その日は、陽射しが穏やかな秋晴れだった。君はボクの前に、現れた。

黒猫のひだまり

使われていない稲畑、敷かれた藁に温かみを感じ、ボクはその上で丸くなった。時々吹き抜ける冷たい風がボクの黒い毛を撫でる。

「あ、見て黒猫」

「本当だ、不吉ー」

上から聞こえる声に耳をかたむければ、そんな言葉が出される。

——不吉？　ボクが？

不思議に思い声のした方を見上げれば、そこには誰も居なく、少し遠く離れた所に人間の後ろ姿がふたつ見えた。

バサッ

そんな音が鳴ったと感じると、全身を黒に染められた大きな鳥がボクの隣に着地する。

——カラスだ。

ボクはこの生き物を知ってる。大きなクチバシと翼を持ち、よく綺麗なものや鳩を追い掛ける。そういえば、前に仔猫がカラスに追い掛けられてるのを見た。

「うわ、カラスと黒猫が一緒にいるよ。」

軽蔑めいた声。まただ、また人間。チラリと横目で見れば、嫌悪の瞳。ボクはこの瞳の色が嫌いだ。でも、こんな瞳で見られる理由が分からない。

——ボクとカラスが一緒にいるから？ そんなにいけない事なのかな。

ボク等の共通点なんて、黒ということだけなのに。

隣のカラスをジッとみつめる。その視線に気付いたのか、カラスはボクを見た。

「なんであんな風に言われるか、不思議かい？」

ボクの疑問をすくいとる様に、カラスは尋ねてくる。ボクは黙って、控え目に首を縦にふった。

「黒猫とカラスは昔から嫌われ者なのさ」

「でもボク何もしないよ？」

「人間とはそういうものだ」

そう言ってカラスは、漆黒の翼を羽ばたかせ、空のかなたに消えていった。

ボクはそれをしばらくみつめ、再び身体に顔をうずめる。緩い陽射しに包まれながら、カラスの言った言葉を思い出す。もしその言葉が本当なら、人間はなんて理不尽な生き物だろう。黒いつて事だけで嫌われちゃ堪らない。

——ボクには人間の心が一理解できないだろうな。

誰に主張するわけでもなく、心の中で呟く。

あたたかな日溜まりに、だんだんと瞼が重くなる。少し冷たい風を感じながら、甘い睡魔に誘われ、ボクは瞳をふせた。

「ニャーニャー。寝ちゃってるのかなあ？」

どのくらいたっただろうか。高いソプラノ声に眠っていた意識が戻る。その声が自分に向けられたものだと思付くのに、少し時間がかかった。

——だれ？

片目だけで見上げると、ある程度距離のある位置に一人の女の子

がしゃがんでいた。

「かわいいな、野良猫？」

首をかしげ、キラキラと瞳を輝かせながら尋ねてくる。

——かわいい？ ボクが？

さっきの人達と言ってる事が逆だ。

「ボクは不吉の象徴なんだろう？ 君はボクの事が嫌いじゃないの？」

「んー？ ハイハイ。かわいいな」

ボクの言葉が通じないのか、まったく見当違いの答えが返ってくる。

その女の子は、ボクに近付く動作はしなかった。ただずっと、一人で話してるだけ。ボクが時々返事をする、嬉しそうに笑った。その笑顔は、嫌いじゃない。お日様みたいに、ぽかぽかするから。

「首輪してないけど、どこの猫ちゃん？」

ボクがそれに答えたって、君は理解できないじゃないか。なのに、なんで色々尋ねてくるのかな。

真上にあった太陽は、いつのまにか、西方へと移っていた。そろそろ風も冷たくなる。ボクは軽く伸びをし、欠伸をひとつこぼした。「寒っ：風吹いてきたし、帰らなきゃ」

女の子はそう言って、立ち上がった。ボクは天を見るくらい首を曲げなきゃ、女の子の表情が見えない。

——帰るのかぁ。

悲しいと感じたわけじゃないけど、少し名残惜しいな、なんて思っただ。

女の子は、着ている上着の前のボタンを留める。そして、ボクの方へと歩み寄り、手を伸ばした。触れられる事に不慣れな為か、嫌と思ったわけでもないのにボクは素早く身体を起こし、女の子の手を避けていた。

「あらら…、まあいいか」

そう言って君は笑ったけど、それはどこか寂しさがみえるだった。

触れるものがなくなった女の子の手は、しばらく宙をさまよい、おずおずともとの位置に戻される。

ボクは、後悔した。なぜか、なんて聞かれたら困るけど。

オレンジにそまっていくな。女の子はそれを少し上目に見てから、ボクに背をむける。

「帰るの？」

ボクが尋ねると、それに反応したのか、君は遠慮がちに振り返った。なにか言いたげに、視線を泳がせる。ボクはちょこんと座り、女の子の言葉を待った。

「えっと：名前分らないから、なんて呼べばいいんだろう。黒猫ちゃんでもいいかな？」

そのままじゃないか。そう思ったけど、初めてつけられた名前に、ボクは少しだけ嬉しくなった。少しだけ、だよ？

「ばいばい。：それから、また明日。ちゃんと来るから、待っててね」

女の子は破顔してそう言い、ふんわりとしたスカートをひるがえしながら、沈みかけた太陽へと走っていった。

——行っちゃった。

取り残されたボクは、女の子の走る姿が見えなくなるまでみつめる。少しずつ、それでも確実に女の子の姿が遠くなる。ちよっと、切なかった。

「やあ、なにを話してたんだい？」

いつから居たのか、カラスがボクの側に寄り、興味深げに聞いている。

——遠くに行っただけだ。

だけどボクは何も質問しなかった。さして気になるわけでもない。猫はそういう生き物。

「あの娘、ボクをかわいいって言った」

畑に敷かれた藁の上を歩きながら、答える。カラスもボクの後についてくる。

「ほお？　また物好きな人間だな」

「物好き？」

「変わり者って事」

「ふうん……」

——そうか、あの娘は『物好き』なんだ。

黒猫は、不吉。嫌われ者。そんなボクをかわいいと言う君は、変わってるんだって。

でもボクは、嬉しかったよ。こんなボクに、笑顔でまた明日、って言ってくれた。大きな夕日を背景に、優しく微笑んでくれた。

ねえ、ボク人間を少しだけ、好きになった気がするんだ。

空はオレンジと青が混ざり合い、一番星が輝いてた。寝所を探し、あてもなく道を歩く。

未だについてくるカラス。身体を凍えさせる夜風。保証のない約束。消えそうな三日月。

今夜はきつと、いい夢がみれるだろう。

(後書き)

愛して下さいなんて言わない。でも、嫌いにならないで。痛んだ心を、癒してくれますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3088b/>

黒猫のひだまり

2010年10月8日15時15分発行